

キリスト教徒がクリスマスを祝うアドヴェントの時期、今年の12月10日から18日までの間、ユダヤ教ではハヌカの祭が祝われました。この祭の起源は紀元前175年にまで遡ります。この時ユダヤを含む地域を征服し王に即位したのはアンティオコスIV世でした。

それ以前は、アレクサンドロス王の後を継いだプトレマイオス王朝でした。この王朝は支配した国々の宗教を重んじて、ゆるやかな政治を行いました。しかしアンティオコス4世以後は、どの国にも厳しく統制を強いてユダ王国に対してもユダヤ教を禁じて、エルサレムの神殿にゼウスの像を建てるとしました。さらに逆らうユダヤ人を弾圧し、生きたまま十字架につけるなど残虐な政治を行いました。

これに耐えかねた司祭マタイアは反乱を起こしその息子マカバイは紀元前164年にエルサレムを取り戻しました。さらに4年後、160年にはセレウコス王朝を追放し、完全な独立を回復したのです。この際に、ユダヤが全盛の時にユダ王国の南にあったエドム地方も占領して、もともと異教徒だったエドム（イドマヤ）人を無理矢理ユダヤ教に改宗させたのです。

その後紀元前63年には内紛が続いたので、ローマ帝国が介入してきて、ユダ王国を支配するようになります。このどさくさに紛れ、ヘロデ大王はローマ帝国にうまく取り入って王の称号を受けて即位したのです。その後ヘロデは、ユダヤを三人の息子たちに統治させます。ガリラヤ地方はヘロ

デ・アンティパスです。サマリアからエルサレム、イドマヤはアルケラオスに引き継がせます。ガリラヤ湖東岸をフィリポスに継がせました。

このイドマヤは、先ほど触れたように、ヘロデ王家の出身地なのです。紀元前160年にマカバイが占領したといいましたが、イドマヤという地域はもともとユダ王国ではありませんでした。マカバイが勢いに乗じて占領しユダヤ教徒に改宗させたのです。そこから出てきたヘロデが王に即位したのでした。そんなイドマヤという異教の地方出身のヘロデ王は民衆を統治しつつ支持を得るために、アメとムチを使い分けるような政治を行っていました。支持を得るための政治の第一が神殿の大改築事業です。この事業により、エルサレムの市民の多くは、ヘロデ王を支持していたでしょう。

しかしここで、東方からやってきた学者たちが「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。…」と尋ねたので、ヘロデ王は心中穏やかではないのです。またエルサレムの人たちも困惑します。東方の学者たちが言うようにヘロデとは別に王が生まれ新しい政権が立てられ、再び戦争が起ころうかもしれないというような漠然とした不安のような感情が沸き起こったのかもしれない。

1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3 これを聞いて、ヘロデ王は

不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと聞いた。5 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。」

ヘロデ王は、祭司長たちや律法学者を集めて、メシアがどこに生まれることになっているのか問いました。彼は、占星術の学者たちが「ユダヤ人の王」といった「王は「メシア」である、マカベアのようにユダヤを独立に導く者であると、すぐさまピンときたのです。なぜなら彼は、ローマ帝国に媚を売って王に就いた者である。決して、救い（独立を）もたらす王ではない、だから学者たちがいう「ユダヤ人の王」とは「メシア」のことだと、よくよくわかっていたので、ここに、ヘロデ王とメシア、救いとは無縁な統治者として、ひとを縛り付ける王と、救い（すなわち統治、支配からの解放）をもたらすメシアとしての王が、到来することが、示されています。

この記述は、イスラエルの民がおかれた政治状況と信仰による支配からの解放についての問題にとどまらず、わたしたちの精神の構造についての問題だともいえるかもしれません。自分の外部から入ってきて知らず間に自分を支配している、その支配はアメとムチを使い分け自分を統治している、…「はたしてそれでよいのか」と問われれば、「はい」と答える、完全に納得しているわけではない、それを、他ならぬ自分自身がうすうす気づいているのです。

朝ドラ「おちよらん」の主人公、竹井千代（杉咲花）は、養鶏を営むが仕事嫌い遊び好きの父、竹井

テルロ（トータス松本）のもとで苦勞する、幼いときから道頓堀の芝居茶屋「岡安」に奉公に出されてたくましく生きる女性だ。茶屋の女将、岡田シズ（篠原涼子）に年季明け（職人などが一人前になるための修行期間を終える）に際して、「あなたはなにがしたいんや」と問われた。生まれてはじめて「何がしたいんや」と問われて、はたと困った。何がしたいのかわからない。幼くして母を失い、仕事嫌いの父のために、学校にも行くことができず、家事をこなし、弟ヨシヲの面倒を見る、養鶏の仕事など、一切合切をやらなければならなかった。奉公先でも多忙な仕事をこなしていく。そのうち父テルロが博打で作った借金に、ヤクザが絡み、ほかの料理屋に売り飛ばされようとする。女将が茶屋の皆を動員して千代を道頓堀川から舟で逃がすのである。

次週から千代は女優の道を進むことになる。実は、芝居茶屋に来て以来、幼いときから仕事をとおして、芝居に異常なほどの関心を示してのめり込むのであった。千代は芝居をやりたかったのである。しかし「あなたは何がしたいんや」と問われたとき、答えるべく言葉が出ないのである。この問いは千代には無縁の言葉、封印された言葉だったのである。なぜなら自分自身で、「何がしたい」という精神の断片をかえりみようとしない、それほど、取るに足らない断片だからです。それは、もっとも小さくされた心の断片なのです。

かつて預言者ミカは、語りました…

ミカ 5・1 エフラタのベツレヘムよ／お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために／イスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。

それをマタイは書き換えた、ミカの言葉どおりに書き留めることができなかったのでしょうか。彼は思いあまつて、こう書き留めました…

6 『ユダの地、ベツレヘムよ、／お前はユダの指導者たちの中で／決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、／わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

ベツレヘムはダビデが幼少時代を羊飼いとて家業を営んでいた地である。

サム上 17・15 このダビデは行ったり来たりして、サウルに仕えたり、ベツレヘムの父の羊を世話したりしていた。

民に救いをもたらす王の原点は、父の羊を飼う羊飼いでした。王というのは称号であり、その内実は羊飼いなのです。幼子イエスは、父の羊を飼う羊飼いとて、到来する。だれもが決して小さくない、小さな幼子によって縛りから解き放たれる。…自分の足で、自分の意思で歩むはじまりが彼によってもたらされた。

つて、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言つてベツレヘムへ送り出した。9 彼らが王の言葉を聞いて出かける時、東方で見た星が先立つて進み、ついに幼子がいる場所の上に止まった。10 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12 ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通つて自分たちの国へ歸つて行つた。

7 そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8 として、「行